

---

# 仮面の騎士（ハイド・ナイト）

バカ夜空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面の騎士

ハイド・ナイト

### 【Nコード】

N3620Y

### 【作者名】

バカ夜空

### 【あらすじ】

銃、剣、刀、その他もろもろの武器の扱いを学ぶ文武学校。

そこに通う表の主人公は最低ランクのDランクだが、裏では銃の整ガ備士ンクミスをやっている仕事は少ないがそれなりの成果を出していた。

主人公と学校生徒達のバトルラブストーリーです！

『昔話（レジェンド）』

昨年の事件の一つにこう言う話がある。

一つ、そこは一般市民が普段はほとんど訪れない小さな村である。

一つ、野獣モンスターが出やすい非常に危険な地域である。

これらを充たしていた村で、野獣モンスターに捕らえられた中学生の女の子を助けようと村の人たちが戦っていると、どこからともなく現れた仮面をつけた騎士が参戦してくれたという話だ。

それを見たものは言った。

それは野獣にさえ恐れず立ち向かう勇気があったと。

それと一緒に戦ったものは言った。

それは剣を使い銃をも使い素手でも戦える武の天才だと。

それに助けられたものは言った。

それは物語に出てくる騎士様のように強くかつこいと。

子供に読み聞かせる絵本にもされた『ハイド・ナイト仮面の騎士』と呼ばれる謎の仮面男のお話だ。

その正体は今もまだ謎であるが……。

「……き……さ……」

「……きなさい……そら」

誰かが俺の名前を呼んでる。眠たいんだ、静かにしてくれよ。

「起きなさいよそら！」

うるさい声でたたき起こされた場所。そこはいつものベッドの上だった。

窓から明るい光が入ってきていて、起きたばかりの俺の目にはその光は拷問のように辛い。

いつもの女の子が起こしてくれたようだが、簡単には目を開けられないのでその子を見ることができない。

まあ、見えなくても声でわかるんだけど。

「お休み、夏帆」

起こしてくれた女の子　なみくろいかほ 笹倉夏帆におはようではなくお休みと告げる。

夏帆とは幼稚園が一緒に親の中も良かったのでいつも一緒に遊んでいた。世間一般で幼馴染みと言うやつだ。

普通幼馴染みでも朝起こしに来るなんて漫画のヒロインくらいだろう。

しかし俺の両親が事故で亡くなっていて、家に誰もいない。

今は妹と二人暮らしをしているが俺も妹も一度寝ると目覚まし時計程度では起きない。

それでいつも夏帆に起こしに来てもらっている。でも今日は眠いから起こさないでほしかった。

「お休みなさい。……って違うでしょ！　起きなさいよ……！」

一人でノリつつこみしてるなっと思っていたら、腹を割るような

勢いでかかと落としをしてきた。確かこれは俺の母さん直伝の技だ。流石に俺にはしなかったけど母さんが父さんによくやってたのを覚えている。……よく耐えてたな、父さん。これ結構痛いぞ。

「起きるから殺さないでくれ。マジで死にそう」  
痛む腹を抑えながらゆっくりと立ち上がる。あー、鳩尾に入ってたかなり痛い。

「あんたはいちいち大袈裟なのよ」  
腹にかかと落としをした張本人が逆ギレしてきた。そんなことしなかったら大袈裟なりアクションもとらないのに。

「自分の朝ごはん作りすぎて余っちゃったから、机の上に置いといたわよ。……ち、違うわよ！ ホントに作りすぎただけなんだから！！」

何故か最後はキレ気味で言ってきた。俺は何も言っていないのになんで怒ってるんだろう？ 女の子は不思議だな。

まあ、ここまではちょっと仲良し（？）な幼馴染みの会話に見えるだろ？ ここまでは世間一般なんだけど……、  
とそこでドアに手をかけた夏帆が振り返って言った。

「あつ、そうだ。この前 ワルサーP38 を現地購入してきて、今は倉庫に入ってるから後で整備しといてくれる？」

そう、何を隠そう俺は銃の整備士で文武学校の戦闘生だ。

銃の整備士は父さんがそうだったから継いだだけ。まあ、多少技術がいいだけだ。

戦闘生は、その名の通り戦う生徒で色々な科目があり、俺はその中の銃刀科じゅうとうかに所属している。

ワルサーP38 はドイツの自動式拳銃で、古いからあまり出回らないが現地購入するほどの品でもないんだけど……まあ、整備程度ならすぐ終わるし学校に行く前にパッとやっつてしまおう。

そうして俺がベッドから立ち上がった瞬間 ぐうううう。  
「……まずは朝ごはんを食べよう」

お腹がSOSを出してきたので朝食をとるためにドアを開けてリ

ピンググへ向かった。

## 『整備（メンテナンス）』

早々に食べ終わった俺は先ほど頼まれた銃の整備メンテナンスをしていたんだが、

「かなり古いな……」

銃床レシーバーにはひびが入っているし、引金トリガーも欠けてるから取り替えないと使いにくいだろう。

それらのことからこれが何十年も使い込まれたと見える。

それにしても……夏帆はどこでこれを手に入れたんだろう？

現地購入って言うてたから新品じゃないことはわかってたけど、ここまで古いものはそうそうどこにでも置いてあるとは思えない。

「後で聞けばいいか」

頭を切り替えて銃床レシーバーと引金トリガーを直していると、俺がいるガレージのような倉庫の入り口から、夏帆に「学校に行くわよ」と声をかけられた。

「もうそんな時間か」

俺は近くにあった時計を見た。その針は確かに『8』を指している。

授業は八時四十分からで学校までは三十分かかる。そろそろ出た方がいいだろう。

「うん、そろそろ行こっか」

「これもちゃんと持って行きなさいよ」

夏帆の言葉と一緒に投げられたのは俺が愛用している刀の 蒼桜と銃の グランパレットブラックスミスだ。

蒼桜は俺が小さい頃に刀鍛冶ブラックスミスだった母さんが俺に造ってくれた唯一の刀。名前は、造ったとき刀に反射した桜が蒼く見えたかららしい。

ほとんど銃を使うから刀はあんまり使わないんだけどね。

ちなみに母さんは病弱で、親父が教えてくれなかったけどどっか

の外国から、緑の多いこのグランプレインに移ってきたそうだ。しかしその母さんもその刀を造った翌年に病気で亡くなった。

葬式にき来ていた人々は刀鍛冶としての才能がずば抜けていた母さんを「惜しい人を亡くした」と口々に言っていた。

……母さんの話はあまり好きじゃないんだけど。

話を变えて……銃のグランパレットは父さんが使っていたちよつと古い自動拳銃で、オートマチック回転式拳銃とは違い発射の反動で自動的に次弾が装填される。

だから俺や父さんみたいな早撃ちには使いやすい代物だ。

それに父さんから譲り受けてからちよつと改造して、一度で弾を十六発撃てるようにした。一回の依頼を少ない弾薬でクリアすることができるので楽だ。

「お兄ちゃん、置いていくよー？」

倉庫の入り口　夏帆のいる辺りから俺の妹の声が聞こえる。きちんと起きたんだな。……いや、起こしてもらったのか。

遅刻する気はさらさらないので俺は倉庫から出た。

「おはよう、セラ」

ぎりぎりまで寝ていたのか、まだ眠そうな顔で欠伸をしている。

「髪の毛がはねてるぞ」

「え！？　どこ？　どこ？」

慌てて髪の毛を触りだした。その、慌ててる姿は……我が妹ながら可愛いな。まるで俺と血が繋がってないみたいだ。

「セラちゃんをからかわないの」

夏帆に頭を叩かれたので反省。結構痛かった。

セラは夏帆に「はねてないよ」と言われると「むう……お兄ちゃんのいじわるう」と頬を膨らませて怒ってきた。

気をつける。それは一部のマニアなら瞬殺されそうな言い方だぞ。いや、意外に使えるか？

「妹をエロい目で見るな！」

「うわっ！！　危ねえ！」



「夏帆の回転蹴りをぎりぎりでかわす。

今のはマジで危なかった。避けなければ顔面コースだ。

「次エロい目でちゃんを見たら確実に当てるからね！」

「そんな目で見てねえよ！」

俺も妹に発情する気は全くねえよ。

「二人ともそろそろ出ないと遅刻しちゃうよ？ 喧嘩の続きなら後でしてね」

が歩き出したので俺と夏帆は一旦喧嘩を止め、後ろに続いた。

普通なら電車がバス通学なのだが、俺とセラは金がないので必然的に歩いて行くことになる。

夏帆も最初は文句ばかり言ってたけど、いつも俺達に合わせて歩いて通学してくれている。行動とは裏腹に優しいやつなのだ。

『実力（アビリティ）』

いつもよりちよつと遅めに出てしまったけど、この時間なら……ぎりぎり間に合うだろう。

「そっぴい夏帆。風の噂で聞いたんだが、Aランクになったんだって？ 凄いいじゃん！」

「え！？ そうなんですか？」

「なんとかってやつも結構あったけど。それより。あんたに言われると凄く腹が立つんだけど」

「仕方ないですよ夏帆さん。お兄ちゃんは普段はちゃらんぽらんでダメダメに見える唐変木ですけど、依頼クエストとか、ちゃんとしなさいといけないところはきっちりしてますから」

後ろだけ聞くといいこと言ってるみたいだけど、最初の方は完全に暴言だよな？

まあ、実際そうだしね。

「ほんとなんであんななかがSランクであたしがAランクなのよ！ 絶対あんたより真面目に授業を受けてるし、依頼の達成度だつて負けてないのに……」

「それは実力がSランク並みってことだろ？ 本当は全然違つよ。でも、なんでだろ？ やっぱりこの実力？」

「殴りたいのかな、あんたは」

「冗談です」

目が本気だ。絶対殴ってくる気だったな。

「でも実際夏帆さんとお兄ちゃんってどっちが強いのか？」

「私の方が強いわね」

「夏帆だろうな」

俺と夏帆両方が即効で同時に言う。

こいつ自信満々に言いやがって……。

しかし、夏帆に俺が勝てない理由はある。

「な、なんでですか？」

「こいつへたれだから」

「断じて違う。勝手に捏造するな」

へたれでも実力は夏帆より上の、しかも銃刀科でSランク並なんだぞ。戦闘で負けるはずがない。

さっき言ったように、俺達の通っている高校には結構科目があるんだけど、その中で一番Sランクが少ないのが俺の所属している銃刀科なのだ。

「このバカは相手が仲間だと銃を使わないのよ」

「俺は絶対仲間には銃口を向けないだけだ」

「お兄ちゃんかつこいいね」

そう言われると悪い気はしないな。

「バカなだけよ」

そう言われると心が痛いな。

仲間に銃を使わなくても、負けることはないのだが、力を押さえないと、めんどくさいことになるからな」

実を言うと、俺の学校内でのランクは最低ランクのDになっている。実際、実力は最高ランクのSなのだが、それは夏帆とセラと文武学校の校長しか知らないことだ。

隠しているのはただSランクの依頼クエストが嫌なのと、いちいち絡まれるのが嫌というどうでもいい理由。

話は戻るが、そのSランクの実力を隠すために、俺は校内ではあまり戦わないようにしている。

もし誰かに見られたりとか、戦ったやつが広めたら、Sランクだとばれてしまう。

だから俺が夏帆に勝てないということだ。

「お兄ちゃんも苦労してるんだね」

「言うほどでもねえけどな」

そう言い、校門を通過して、立ち止まる。

「私はこっちだから。またね、夏帆さん、お兄ちゃん」

俺は「おう」と単調な返事をして再び歩き出した。

高校は中学と同じ敷地にあるが俺達の家からは中学の方が近い。早足で行かないと遅れるかも。

夏帆も同じことを思ったのか、走り出したので俺もついていくように走った。しかし残念なことに、それと同時にチャイムが鳴り響く。

「夏帆、先に行ってるぞ！」

それまで後ろについていくように階段を駆け上がっていた俺のだが、時間が時間なので夏帆には悪いが先に行かせてもらおう。

今は一階と二階の間にある階段にいるので、二階につくと俺は窓から飛び出した。

このままでは落ちるので、ワイヤーを伸ばし、先に取り付けてあるフックを四階の窓に引っ掛ける。

後は壁を力いっぱい蹴り飛ばし、それと同時にワイヤーを回収すれば四階まで登れる。

左右を眺め、誰もこちらを見ていないか確認して、何事もなかったかのように教室に入る。ぎりぎり間に合った。

『要請（チャレンジ）』

俺が席につくとチャイムが鳴り終わる。俺が開けておいたドアから送られて夏帆が入ってきた。

「あんた私を置いていったわね!!」

「仕方ないだろ？ 間に合いそうになかったんだ」

「だ、誰のせいで遅れたと思ってるのかな？」

「……俺に整備を頼んだ夏帆のせい？」

「殺してあげる」

そう言い、スカートの中から拳銃

メアトル・カルチャー  
対人連銃を取り出す。これ

は火力は少々弱いが反動がかなり少なく女子に人気の自動拳銃だ。

撃たれると、火力が弱いことを差し引いてもかなり痛いことになりはない。

あの乱暴な夏帆でも流石に教室では……って目が本気だ!!

夏帆が対人連銃の引き金を引こうとして、

「おい、笹倉。銃の使用を許可するとはいえここは教室で、しかも朝のHR中なんだぞ？ 発砲するなら他所でやってくれ」

「う………すみません」

夏帆は周りを見て恥ずかしくなったのか頬を赤らめた。

その後俺をきつく睨んで、対人連銃をホルダーになおし席に戻った。

……危なかった。先生が止めなければ確実に俺を狙って撃つたな、あいつ。

佐野先生は夏帆がおとなしく席に座つたのを見てちょっと荒い口調で、

「さてと……じゃあ、朝のHRを始めるよ。まずはこれを見る」

黒板にバンツと叩きつけたのは、一枚の紙切れだった。

これは俺の一番嫌いなタイプだ。俺は窓際が一番後ろの席なのでよく見えないが佐野先生が黒板に紙を貼りつけるときは大抵これだ。

「このクラスに討伐要請バトルチャレンジがきてる。校長の押し印付きでな」

佐野先生が白紙の紙をみんなに配り始める。

バトルチャレンジ  
討伐要請。

クエスト これを話すには依頼と要請の違いを知ってもらわなければなら  
ない。

通常、依頼クエストとは放課後に単位が欲しくて個々が自分にあつた依頼を受け、それをこなすと報酬と単位が貰えるという簡単なものだ。

しかし、要請は依頼とはいくつかわ違う。

チャレンジ 要請はクラスで選ばれた六人がモンスターや犯罪者を討伐、もしくは逮捕するものである。

依頼と違い、自分がその敵を倒せるランクでなくても受けることができるが、その分難しかったり強かったりするので病院送り最悪の場合死ぬこともある。

それに校長の押し印ありということはAランク以上の要請になるのだ。

俺は校内で実力を出したことはないが、先生達は知っている。それにこのクラスにAランク以上は夏帆を含めた三人しかいない。俺は策士としても知られているので、

「多数決の結果、Aランク春日谷陽菜かすがや ひな、茅野美奈かやの みな、笹倉夏帆。次にBランク新庄明希あきほ、ジェシカ・ストロープ。最後に……Dランク中川そら」

こんな感じにいつも選ばれるんだよなー、俺。要請にDランクで選ばれる戦闘生は全クラスの中で俺ぐらいだろう。それぐらい低ランクのやつは選ばれない。

「また中川か……。Dランクのくせによく選ばれるな、お前」

「そうですね佐野先生。なぜ俺は選ばれるんでしょうね」

「それはこのクラスがバカだからじゃないか？ とりあえず、今呼ばれた生徒は今からすぐ準備をして行くように」

佐野先生は今呼んだ生徒たちの顔を見て「じゃあ、解散だ」と黒板に貼り付けた紙を投げた。

それを取ったのは『クイック・ユニコーン高速の剣獣』という二つ名を持ち今回のメン  
バーにも選ばれた、刀銃科の茅野美奈さんだ。

赤 いや、緋色に近い髪の毛を揺らしながら紙を取った彼女は、  
二つ名通り高速だった。

大抵Aランク以上には二つ名がつく。夏帆も二つ名をもらったと  
か言ってた。

それにしても……人間で、しかも女の子に獣は酷いと思う。

「お前も早く行け」

佐野先生に言われ、辺りを見回すと選ばれた生徒はみんないなく  
なっていた。

まずい。出遅れたな。

俺は急いで鞆に入れておいたテイスタP82と言う小型拳銃を手  
にとり、紙に書いてあった集合場所 校門に向かった。

『編成（ダイバージョン）』

一通り用事を済ませて校門に行くと、既に茅野さんと茅野さんの戦妹弟せんまいていであるう男が待機していた。

戦妹弟。

中高一貫の文武学校では、まだ依頼などを受けられない中学生の育成として、高校生が中学生と二人一組でチームを組むのだ。

人数が足りない場合は三人一組になる。俺も三人一組なのだが、一人は今日休みだそうだ。

高校生は男女比率が同じくらい（若干女子が多い）なのでいいのだが、中学生は圧倒的に女子が多いのだ。

なぜ女子が多いかと言うと、男子は姉妹校ひいらぎの柊学校に推薦入学で入ってしまうから。

なのでほとんどの高校生が中学生の女子と組むことになる。それは別にいいのだが、

「先輩〜！ 先輩先輩先輩〜！！ ずっと会いたかったんですよ〜！」

こんな感じになる場合もあるんだよな。誰だ、こんないらん制度作ったやつは。

「先輩！ 私寂しかったんですよ？ 先輩がDランクの依頼クエストしかうけないから、ほとんど一緒にいられないし」

「俺の知ったことじゃない」

先輩先輩うるさい彼女は、俺が戦妹弟を組んでいる中学二年生の梅宮桃うめみやももだ。

桃は依頼ができない中学レベルでBランク。俺より軽く実績はいい。

それにこいつは俺の本気を見たことがある。

俺が高一の頃、Dランクの軽い討伐依頼に行ったとき、たまたま会ってしまったのだ。中一だった頃の桃に。



そのとき、急いでいた俺は本気でモンスターを討伐した。それを見られてから、いつもいつも「戦妹弟を組んでください!!」と言  
い寄られて、仕方なく組んだのだ。

実力的には申し分ないが戦闘以外はべたべたしてくるので、全体的にはかなり微妙な子だ。

まあ、慕ってくれるのは嬉しい。

「落ち着け、桃」

未だ先輩先輩言ってくる桃を黙らせていると、残りのメンバーが来て、全員揃った。

それから軽く自己紹介をして、目的地へと向かった。

ちなみに選ばれたメンバーと戦妹弟は、春日谷さんと宮城吹雪さん、茅野さんとその弟の茅野陸君、夏帆と俺の妹のセラ、新庄さんの戦妹弟は休みだそうで、ストロープさんと楸玲奈さん、そして俺と桃。

……このメンバーなら俺は力を使わなくて大丈夫だろう。

そんな気軽な気持ちで目的地に向かった。

「遅いぞ、中川そら」

「そうよ。早くきなさいよ」

「茅野さんも夏帆も早すぎるんだ。もうちょっと待ってくれ」

「私のことは茅野、もしくは遥でいいと言ったはずだが?」

「……すみません」

茅野さん……じゃなかった。茅野……と夏帆のスパルタがかなり効く。

俺がちよつとでも遅くなったら、遅いだの早く来いだの言ってくる。夏帆だけに言われる分はまだ大丈夫なのだが茅野が加わって結構辛い。

俺達の会話を聞いていた陽菜が「こ、ここで休憩にしませんか?」

と助かる提案を出してくれた。

ちなみにバス、もしくは電車移動かと思ってたらまさかのランニング。場所がそう遠くないからって理由で。

「ありがとう、陽菜。もうちょっとで死ぬところだった」

「い、いえ、とんでもないです！ 私はただ中川君が疲れてそうだなー、って思ってただけですから！」

「それが俺からしたらありがたいことなんだよ」

「そそ、そんなもつたいたいなお言葉を陽菜にかけていただけなんて……ああ、ありがとうございます！」

俺が一番仲がよくなったのは多分この春日谷陽菜だ。彼女は少し控えめな性格だが、先ほどのように俺を気遣ってくれる優しい性格を持っている。そんな性格このメンバーにはなかなかいないぞ。

「……中川そら。今悪口のことを考えなかったか？」

「気のせいだ」

茅野はかなり勘が鋭いな。

「……そうだな。中川そらが私を裏切るわけがないな」

「……………」

裏切りはしないが俺達の仲はそこま でよくないと思う。ばれなかったことはラッキーだけど。

「こんなものを拾ったんだけど……姉さんはなにかわかる？」

茅野の弟である陸君が拾ってきたものは……なんだ、これ？ 黒く、筒状になっていて少し熱い。

これはまるで……、

「陸君、ちょっと貸してくれる？」

「あつ、はい。わかりました」

俺は陸君から受け取った謎の物体を見る。

確かにこれを扱っていてもきちんとして整備しているもの以外ほとんど気づかないだろう。

今では俺のように銃ガンスミスの整備士がいるから、自分で整備しているものは限りなく少ない。

もうわかったとおもっが、これは拳銃の銃口　しかもさつきま  
で使っていたと見える。

しかし、銃口だけしかない。……なにかに切られているみたいだ。  
この挟られたような切り口は……まさか野獣モンスター!?

「? どうだ、中川そら」

「これは拳銃の銃口だよ。それにこれの使用者は多分この周辺で襲  
われている」

「襲われてるの!? 早く助けないと!!」

夏帆の言う通り、早くしないと野獣に傷をつけられるかもしれな  
い。

「みんな一緒に行く方が安全だけど三チームに分けさせてもらっよ  
いかな?」

みんなに賛成を得ようとするが、三チームにする意味がわからな  
いのか、なかなか頷いてはくれず首をかしげている。

「ただ俺以外高校生の個々はみんな弱くない。だから分けたとして  
も負けることはないだろ? そして分けた方が捜しやすい。これで  
いいか?」

俺が事細かに説明する。その意味を最初に理解したのは陽菜だっ  
た。

「さ、策士って呼ばれてる中川君が言うからには意味があると思う  
の。ここでじっとしてるよりはいいんじゃないかな?」

そして一番に　いや、正確には二番に動き出した。

一番の彼女はすでにいなくなっている。『クイック・ユニコーン高速の剣獣』の茅野だ。  
多分考える前に行動したんだろう。

「陽菜が茅野の方向に行ったから、後は二チームに分けよう」

そしてジャンケンをした結果、俺達と新庄さんのチーム、夏帆達  
とストロープさん達のチームに分かれた。

バランス的には夏帆達に片寄っているが、俺達のチームも俺が本  
気を出せば負傷者が出ることはないだろう。なるべく本気は出した  
くないけど。

「これを渡しておくから、敵を見つけたら使ってくれ。大きな音でするからすぐにみんなが駆けつけてくれるはずだ」

夏帆に手渡したのは ロケット花火だ。時間がなくてこれしか持ってこれなかったのは不覚だけど。

ロケット花火は使い方しだいでは目眩ましにもなるから結構使える代物だ。

そして「解散」と先生の真似をすると、みんな一斉に動き出した。

『救助（レスキュー）』

「なあ、桃、新庄さん」

「なんですか？」

「なんででしょうか？」

「さっきは言わなかったけど、ここ実は「ファイバイニティ・フォレスト楔の森」って言って、Aランク危険地域に登録されているから戦闘生以外は入れないようになっている森なんだ」

「それがどうしたんですか？」

新庄さんは察しが悪いようだ。今の説明とさっきの銃の話の聞いてなかったのか？

「さっき落ちていた銃口は熱を持っていたから俺達が来るちょっと前まで使われていたんだよ？　つまり戦闘生以外の人間がこの森にいるというわけだ」

「それって違法になるんじゃない？」

「新庄さんの言う通り、危険地域、それにAランクともなれば違法者として最低一年の刑が下ると思う」

しかしそれは知らずに入ってしまった場合の一年というわけで、そこになっっている植物や動物の乱用、密売をしていれば五年か六年長ければ十数年までいくだろう。

「見つけたら……やっぱり報告するんですか？」

「俺はそれが乱用とか密売以外なら、なにも悪いことをしていなかったら報告する気はないよ」

「優しいですね」

「そうか？　だってこの銃口の持ち主は女の子だし」

「女の子？　先輩はなんでわかるんですか？」

俺は仮にも銃の整備士ガンズミスなんだ。どれくらい銃を扱ったと思っている。特徴のある銃を見れば大抵それくらいはわかる。

「まずさっきの銃口だけ」

そう言いながら愛用している銃のグランパレットとポケットに入れておいた銃口を取り出す。

「この銃口はグランパレットより少し小さい。グランパレットは四ミリ口径で、それより小さいものは俺の知る限り二つしかない。それも最近流行りの RRS47式 と スクエア88 の三ミリ口径だ。その二つは対人連銃より反動が少ないから女性用 大抵が子供の護身用として販売されているんだよ」

「それで女の子がいる、ってわけですね？」

「そう言うことだ。まあ、拾ったって可能性もなくはないけど」

ここは監視カメラがあるわけでも警備がついてるわけでもないの  
で、危ないことを差し引けば一応誰でも入れる。

どっちかと言えば、違法者が銃で戦ったときに落とした可能性の  
方が高い。

それなら男でも女でも危険になれば女性用の銃を使うだろう。

「誰かー！！ 助けてくださいー！！」

ふとキーの高い 女の子の声が聞こえた。

銃口の持ち主を捜していた俺達は、まさかと思ひ声のした方を見  
た。

案の定、栗色のショートヘアの髪の毛を揺らしながら、モンスター野獣か  
ら逃げ回っている女の子がいた。

「早く助けないといけませんねー」

「いや、待て。……桃と新庄さんはみんなを呼んできてくれ。ロケ  
ット花火がないからこの場で呼べないんだ」

時間がなかったので一本しか持ってこれなくて、その一本も夏帆  
達に渡してしまい助けを呼べないのだ。助けを呼ぶために使うの  
ではないが。

「先輩はどうするんですか？」

「俺はあの子を助け出す。それからみんなが来るまで逃げる」

「そんなのそらっちーが危険すぎますー」

「大丈夫だ。銃の扱いには長けてると自覚しているほどだし、一応策士って呼ばれてんだぜ？ 作戦もあるし、無謀な挑戦はしねえよ」

「……わかりましたー。私達が戻るまで無理はしないでくださいねー」

「おう、任せとけ」

桃が「早く戻ってきますからね！」と言って、みんなを呼びにいったので、現在進行形で逃げている女の子を助けることに集中する。その前にまず言うておくが、俺は桃と新庄さんに全くと言っていいほど期待していない。

期待というかそれ以前にこの広い森でばらばらになった二チームをそう簡単に見つけられるとは思えないのだ。

だから行かせる必要はないのだが、俺が二人を行かせたのには理由がある。

まずは彼女を助けてからだな。

桃達に作戦があるって言ったのは二人を行かせるための口実だったので、実際はなにも考えていないのだ。

「きゃっっ！！」

作戦を考えていると、彼女が石に躓いたようで前のめりにこけていた。

「考えるより行動、だな！」

俺は彼女が野獣に突進される前に草から飛び込み、彼女の手をとりそのまま横っ飛びして回避した。

「っ！！」

モンスター

野獣の頭に生えた角が彼女の右足に当たり、少量だが血が滴り落ちている。この程度の傷なら走って逃げられるだろうと思ったが、骨を折っているようでその痛みで気絶してしまったようだ。

「危ない！」

避けられたことに苛立ちを覚えたのか、野獣が彼女の隣りにいる俺に目標を変えてきたので彼女を突き飛ばした。

当然俺は動けないので野獣の突進をもろに受けるといふ結果になる。俺は吹っ飛ばされた勢いで近くにあった草むらの中に飛び込んだ。

野獣は完全に俺がやられたと思い、怒りの矛先を負傷して気絶している彼女へと向けた。

このままではやばいと思い、俺はあるものを取り出した。



『騎士(ナイト)』

「みなさんどこにいるんでしょうか？」

「わかりませんねー」

先輩に頼まれてばらばらになった二チームを捜しているんですが、どこにいるんですかー!!!」

この広い森でどうやって捜せつて言うんですか!! 先輩は絶対わかっていて私達を行かせたはずです!

「落ち着きましようよーももっちー」

「誰がももっちですか!」

新庄先輩に変なあだ名はつけてほしくありません。……まあ、先輩につけられたら変なあだ名でも……って今はそんなことを考えるんじゃないよ!

「新庄先輩! やっぱりこんなに広い森であの少数メンバーを捜すのは無理がありますよ! 先輩のもとに戻りませんか!？」

「んー……そうですねー。一度戻って私の アイアンメイデン 鉄の処女 で敵の足止めをするのもいいですねー」

「鉄の処女? なんですかそれは」

「あなたも高校でBランク以上になればわかりますよー」

新庄先輩はフツツと笑うだけでなにを教えてくれない。それは後で別の先輩か誰かに聞けばいいとして、

「とりあえず先輩のもとに戻りましょう!」

先ほど私の案に承諾してくれた新庄先輩は、今は難しい顔をしている。

「どうしたんですか?」

私の質問に新庄先輩は最もな返事をした。

「……私達どこから来ましたか?」

……ほんとにもうどうしましよう。

ダメだ。殺される。今まではなんとか必死に逃げ回っていたのだがとうとう運が尽きた。

体力の限界か、はたまた疲労のせいも足元にあった石に気づかず前のめりにこけてしまった。

座ったまま顔だけ振り向けるとすぐ近くに私を追っていた野獣がいた。こいつは私を追っていたスピードで私に突進してきている。

誰かに助けを求めようとするが、声がでない。でてくるのは荒い吐息だけ。そもそもこの危険地域に人や私の同種みたいなものがないわけがない。

もう……ダメ、かな。

そう思った瞬間、私を突き飛ばす影が見えた。

それは人の形をした影だった。しかしその正体を確認する前に足に強烈な痛みを感じ、意識が薄れていく。

ここで倒れるわけにはいかないので意識はかすかに保ったが、身体を動かすことができない。

その時突然私は突き飛ばされる感覚に襲われた。感覚ではない。私を助けた影が突き飛ばしたのだ。

当然なぜ突き飛ばされたのかわからないので講義しようと思ったが、影は矛先を変えた野獣の猛突進によって突き飛ばされてしまった。

野獣の角からは血がぼたぼたと滴り落ちている。

あの影は私を助けて殺されたんだ……。次に殺されるのは私なんだ。

突進してくる野獣を前に、私は目を閉じた。

……。

……。

……。

……あれ？

いくら待っても野獣が私に突進してくるけはいがない。それどころかなんだかさつきより遠ざかった感覚がある。

恐る恐る目を開けた私が見た光景は

「だ……誰？」

私の目に映りこんだのは、仮面をつけた人間だった。

野獣は仮面の人間にやられたのか、顔に傷をつけて前方に大きく吹き飛んでいる。

巨体の野獣を蹴り飛ばすか殴り飛ばすかをしたのだ、力がかなり強いということがわかる。

（私を助けに来てくれたのかな？）

そう思わずにはいられない。しかし、それと同時にその人間の着ている服は昔会ったことがある『戦闘生』という種類の人間が着ていたと思い、この野獣を倒しに来たのかもと思った。

「大丈夫か？」

その仮面の人間は平然と私に話しかけてきた。

声からして多分男だろう。女の声と間違えてもおかしくないキーの高さだけだ。

「あ、ありがとうございます。あつ……私が怖くないんですか？」

私は人間の形をしているが、実際『戦闘狼』バトルウルフと呼ばれている野獣なのだ。

理由はわからないが数日前、突然人間の体になってしまった。さらに人間の身体や見た目に狼の耳と尻尾がついているというおかしな身体になったのだ。

「別に怖くないさ。あんな野獣とも平気で戦えるんだし、お前と似たようなやつを俺は知ってる。それよりけがは大丈夫なのか？ 頭から血が流れているけど」

指摘されてから頭がズキズキと痛くなる。触れると生暖かくドロツとしたものが手についた。

すぐにそれが血だと分かった。それと同時に彼の後ろに回復した野獣が突進してくるのがわかった。

「危ないです!!」

「大丈夫だよ。……つたく、うるさい野獣だな。ここにいる彼女くらいかわいかったらまだ救いようがあるのに」

「ふえ!?!」

はははつと笑い、その後深いため息をついてゆっくりと立ち上がった。

右腕に巻きつけられた包帯をゆっくりと解いていく。けがでもしていたのかな? と思ったが、腕の下からでてきたものは、

「紋章……ですか?」

「ああ、見るのは初めてかい? これはAランクよりのBランク以上の生徒……って言ってもわかんねーかな? まあ、一部の強いやつが持てる能力だ」

「いえ、一応ありますけど……大きくないですか?」

普通は手首から肘程度なのだが、彼の紋章は手首から肩まで見えている。

「それほど強大で危険な力なんだよ」

こつちを向いて説明してくれているが、野獣は木々をなぎ倒し、確実に近づいている。

彼は私への説明を終えたので再び野獣の方を向く。

「ミミクレイ・ナイト喰われて喰らう者 発動」

『騎士(ナイト)』(後書き)

初めまして。えーと、バカ夜空です

初めて読んでくださる方、初めて読まれた方、ありがとうございます！

今回とうとう仮面の騎士が出てくださりましたね いやーお疲れ様！  
次回も期待せずにお待ちください

## 『終結(ロングレッション)』

「はいはい。ひっさしぶりだね。能力使用許可認証しま〜す」  
彼がそう言うと、ポンツと音がして彼の肩辺りに　まるで絵本などに出てくる妖精のような小さい女の子が現れた。

(あれは確か力を使う時に出てくる……)

確か代行体だったはずだ。自身の力によってその効果は違うのだが、種類は力の数だけあるらしい。私は力が使えないのでそういったことにはあまり詳しくない。

「第一章の使用許可を取ってくれ」

「りょうか〜い。第一章の許可生け贄、一ついける?」

「今日一日の味覚をやるよ。それで生け贄一ついけるか?」

「だいしょ〜ぶだよ。第一章の使用許可がでた」

彼の代行体がパンツと手を叩く。なにかあったのだろうか? 声が小さくて聞こえなかったから代行体と彼の会話が聞き取れなかった。

その音のすぐ後に彼の紋章が薄く輝きだした。

「第一章 スクレイム・パニッシュ 絶句・絶叫の拷問道具　より、第五番 アイアンメイデン 鉄の処女」

今度は彼の目の前の何もなかった空間からいきなり鉄でできた縦長の箱が現れた。箱というより棺桶に近いそれは、彼の「開き、喰らえ」という合図とともに、ふたが開き、野獣に噛みつくようにして中に閉じ込めた。

「す、凄い……」

バトルウル彼の攻撃の強さも凄いと思ったが、一番凄いのは展開の速さだ。戦闘狼はこれでも野獣状態ならAランクの上級野獣なので私も野獣の頃は戦闘生と何度も戦ってきた。

そこで今のような技を見たことがあったが、ほとんど展開するの

に時間がかかり簡単にかわすことが出来た。しかし今を見ているとどうもかわせる気がしない。

「ぐるああああアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

完全に箱に入ったので身動きがとれないと思っていたが、野獣はその箱を力で強引に壊して這い出てきた。体には無数の傷があり、結構ダメージを受けていることがわかる。

「これが効かないなら次の技を使おう。今度は第八章と第二章の使用許可を取ってくれ」

「りようかいい。第八章、第二章ともに生け贄、一ついける？」

「今日一日、嗅覚と触覚を生け贄で両方いけるか？」

「だいじょぶだよ。第八章、第二章ともに使用許可がでた」

今度は二回パンツパンツと手を叩く。するとまた彼の紋章が、さつきより強く輝きだした。

「第八章 イチユード・ノイズ 雑音響く薄い鉄 より、第一番 グラヒテイ・ノイズ 重力操作の雑音」

先ほどとは似ているが中身が少し違う言葉とともに、  
「落ちろ」

一言。たった一言だけだったのに野獣の体はまるで地面に吸い寄せられたようにひれ伏した。

私にも少しその技が効いたようで体が重くなる。

「ああ、ごめんね。ちよつとの間だけ我慢してくれるかな？」

「だ、大丈夫……です」

彼は私のために戦ってくれているのだ。やめてくださいなんて言えるわけではない。

「次で決めるからちよつと待っててね」

「第二章 クイック・ユニコーン 高速の角獣 より、第一番 シエット・アクレイション 瞬時加速の噴出口」

姿勢を低くしたと思えば、次の瞬間言葉とともに消えた。

いや 移動したのだ。光の速さか、はたまた音の速さか。とりあえず見えないほどの凄まじい速さで移動したのだ。野獣の背中の上に。

野獣も気づいていないようで辺りを見回している。

彼は腰の辺りに装着していた二つの拳銃を取り出して野獣の背に押し当てる。

「急所は外してやるよ」

「パンツ、パンツ!!!」

二つの銃声は野獣の痛みによる声をかき消すほど大きくて、音波で木を揺らしていた。ぎりぎり耳を塞いでいたけどそれでも痛い。どうやったらあんな小さい銃であればほど大きな音が出せるんだろうか？

私が疑問に思っていると、彼はまた消えて 高速で私の元に戻ってきた。

「敵は倒したから俺は行くけど……この服のことは誰にも言わないでくれるか？」

「は、はい!」

「後、俺の知り合いに中川空ってやつがいるからそいつの元に行け。わかったか？」

私は「誰ですか？」と問いただそうとしたが、

「大丈夫ですか？」

その返答は突然現れた女の人によって言葉にできなかった。

「え、あ、はい! この人に助けられたから大丈夫です!」

「この人ー? ここにはあなたと私」

「待つてくださいよ新庄先輩!」

「ももっちーが遅いんですよー?」

「私のせいですか!？」

最初に来た新庄先輩と呼ばれた女の人と後から来たももっちと呼ばれた女の人には彼が見えていないようだ。

「……え!？」



いや、違う。彼がいなくなっているのだ。先ほどまで居た彼は多分だけど突然の二人の来訪者に正体がばれてはいけけないのか、また高速で移動してこの場からいなくなったのだろう。

「がさがさつと草が揺れる音が聞こえた。」

「誰ですかー？」

新庄という名の女の人は草の方向に問いかけた。

口調は穏やかなのに微妙に殺気がでている。本気で警戒しているのだろうか。

「俺だよ、俺」

ふらふらとした足取りで、草の間から最初に私を助けた男の人が現れた。

その男は野獣にやられたのか、お腹を押さえている。そしてそこから少量だが血が垂れている。

「だ、大丈夫ですか、先輩！」

「ああ、俺は大丈夫だけど……その子は大丈夫？」

「あっ！ はい！ ありがとうございます」

「そらっちー、無理はいけえないと言ったはずですよー」

「そらっち？ そらっち。そら、っち。空、っち！？」

「もしかして中川空さんですか？」

「え？ うん、そうだけど？」

私の読みは外れていなかった。この男の人が、仮面の男が言っていた『中川空』なのだ。

「確か彼は私に……。」

「あの……一ついいですか？」

「ああ、別にいいけど？」

「私を飼ってください！」

「うん、それぐらいなら……え？」

『終結(ロングレクション)』(後書き)

カハツ……いやー、疲れました

まずは、初めて読んでくださる方、初めて読まれた方、ありがとうございます  
ございます！

なんか技がいつぱい出てきましたね……。

またそういうの作りますかねー……。

とりあえず、次回も期待せずお待ちください

『名前（ネーム）』

沈黙が場を埋め尽くす。あー、空気が重い。

その空気に耐え切れなくなった俺は彼女の目を見て、

「えーと、今なんて言ったかな？」

「私を飼ってください！」

「出来れば聞き違いがよかったよ！」

女の子を飼うのか？ いや、耳と尻尾がついているから中身は野

獣か何かなんだろうけど、見た目は女の子。

飼うとかそういう話ではないだろう。

「何でもしますから私の飼い主になってください！」

「その言い方はなんとなくいけない気がするんだけど！？」 後誤解

を生みそうだからそういう事はあまり言わない方が俺の肩が外れる

！！」

「その話を詳しく聞かせてもらおうかな？」

「離してくれ夏帆！ 話せばわかるから！ 離して話せばわかるか

ら！！」

音に駆けつけた夏帆に右肩を強く握られて悶える俺。

手が！ 手が青くなってるから！ いろいろやばいことになりそ

うだからそろそろ離してくれると嬉しい！

「殴る前に話だけは聞いてあげてあげよう」

殴る前に肩を潰そうとしませんでしたか？ 強めのスキンシップ

なんですか？

「私はこの人と仮面……じゃなくて、この人に命を助けられました。

ですから身体で返すためにこの人に飼ってほしいんです！」

「か、体で返す……？」

「はい！ もっとも、なにができるかはわかりませんが……」

エロい事を考えてしまったことに少し反省。

「そらをやるのは茅野たちを呼んでからにしましょう」

「やる！？ 俺は殺されるのか！？」

「私も笹倉先輩の意見に賛成です」

「桃まで何を言い出すんだ！」

俺の命が危ない！

今すぐ脱出しなければいけないのに身体が動かない。

「置いていかないでください、マスター！」

「誰が誰のマスターだ！！」

さっきまで倒れていたのに必死に俺の足を掴んでくる。

そんな契約をした覚えはない。夏帆たちの視線が痛いので今すぐ離してほしい。

俺たちのやりとりを見ていた夏帆が呆れた様子で俺に近づいてきて右手を振り上げた。

「死亡フラグゲット！！」

「ごはっ！！」

その右手が俺の腹に勢いよく振り下ろされる。

それがちょうどけがをしている場所にクリーンヒット。さっきまで止まっていた血がまた溢れてきたよ！

「とりあえず茅野たちを呼ぶからね。聞いているの？」

お前のせいで何も言えねえよ。今口を開いたらいろいろ駄目なものが出てきてしまいそうだ。

夏帆は俺が渡していたロケット花火を上に向かって地面に挿し、持ってきていたのかと疑問に思うライターで火を点けた。

花火はパアンと大きな音をたてて高く飛んでいった。そして木を追い越したぐらいでさっきより大きな音を出して爆発した。

「後は茅野たちが来るまでにあんたを尋問にかけるだけね」

「俺に拒否権は？」

「あるとでも思ってるのかな？」

「……ごめんなさい」

俺の謝罪もむなしく、この後茅野たちが到着するまで口では言えないような酷い目にあわされた。

「失礼しました」

学校に戻ってきた俺達は職員室で報告を済ませ、教室に戻ろうとしていた。

「とりあえず連れてきたのはいいけど、本当に俺の家に来るのか？」  
「はい！ 嫌と言われても、飼ってくれるまで家の前で待ちます！」  
彼女の件については先生がどうにかしてくれればいいが、ほとんどの確立で俺が育てることになりそうだとも言われた。育てるって……飼うとはまた別だけどそれはそれで酷いと思う。仮にも女の子なんだし。

「忘れていましたけど、名前はなんていうんですかー？」  
「そっぴや聞いてなかったな。言われなかったので特に気にしなかったみたいだ。」

新庄さんの質問に彼女は呆然とした表情で、  
「私は元々野獣だったんですよ？ あるとすれば『バトルウルフ戦闘狼』という名前だけです」

「それはかわいそうですねー。そうだー、そらっちーが考えたらどうですかー？」

「それはいいですね！ マスター、私に名前をくださいー！！」  
「別にいいけど、どうなつてもしらないよ？」

「まず狼って何科の動物だっけ？ 猫科？ 犬科？ ……犬科だったはず。」

犬ならやっぱポチとか？ いや、仮にも女の子なんだぜ！？

さすがにポチはないだろ。なら犬子とか？ それも変だろ。犬の鳴き声はわん……、

「わんこでどうだ！？」

名案を思いついたように俺が言うと、

「……あんたのネーミングセンスは同情するほどかわいそうね」

「……私がそらつちーに頼んだからいけなかつたんですかー？」

「なんでそんなこと言うんだ!? かわいいじゃないか、わんこって！」

俺はこれでも本気で考えたんだぞ？ なかなか良い名前だと思っただけだな。

「わんこ……ですか？」

「あつ、嫌だった？ 普通は嫌だよ。あのバカにもう一回考えさせるわね」

「いえ、いいです！ わんこ……わんこかあ」

彼女 いや、わんこは目を細めて嬉しそうに尻尾を左右に振っている。気に入ってもらえたんだろうか？ それは何よりだ。

「あ、あの！ ……ありがとうございます」

不覚にもわんこの笑顔にドキツとしてしまった。

おい、俺！ なにを考えているんだ！ 見た目は女の子だけど野獣なんだぜ？ しっかりしてくれよ、俺！

「あー、そらつちーの頬が赤くなってるー」

「あんた野獣に発情してるの……？」

「違う！ 年中頬が赤いだけだ！」

「それはそれで……大丈夫？」

かわいそうなものを見るような目で見てくる夏帆に必死で抗議をする俺は、かなり惨めだ。

「……マスターは私で発情したんですか？ ……いいですよ。マスターに初めてを捧げます！」

「おいおいおい！ 学校の中で服を脱ぎだすな！ いや、学校の外ならいいって話でもないけど！」

わんこは学校指定の制服を着ているが脱ぐのがかなり早く、上は全て脱いで次にズボンへ手を伸ばす。俺はその手を寸前で抑える。

ちなみに学校指定の制服もここに来てから着せたもの。野獣に襲

われていたもので特に気にしなかったが、楔の森で会った時は、その、  
……産まれた時の姿だった。

「離してくださいマスター！ 私はマスターに初めてをあげようと思つて！」

「大声でそういうのを言うな！ しかも公衆の面前で！」

「そうよ！ そらはホントにやりかねないんだから！」

「おいしいおいしい！ お前はどっちの味方なんだあ！？」

「この子に決まってるじゃない！」

俺達がギヤーギヤー騒いでいると校内放送が流れた。

『えーと、二年何組だっけ？ まあ、二年の中川空。とつと相談室に来い。繰り返す』

「「「」」」」」」」」

佐野先生は本当に教師なんだろうか？ 口が悪いし、それ以前に

佐野先生は俺のクラスの担任だった気がするんだけど。

自分のクラスの生徒を忘れるなんて……酷いにもほどがある！

そのことを言ってやろうと、わんこの処理を夏帆達に押し付け俺は職員室の隣にある相談室へ向かった。

この時、俺はこの後なにが起こるのか、予想にもしなかった。

『名前(ネーム)』(後書き)

くふー いやはや、疲れましたね……。

まずは、いつも読んでくださる方、初めて読まれた方、ありがとうございます  
ございます

今回はワン子の名前が決まってよかったですね……ってよくねえよ  
！！

ワン子ってなんだよ！かわいそうだろ！

ちなみにこれで一章終了です 次回から二章として……

まあ、次回も期待せずお待ちください



『選出(チヨイス)』

「遅いぞ」

「これでも学校の規則を守って、廊下を走らずきちんと歩いてきたはずなんですけど」

「ふん、偉いことだな優等生」

「先生からすれば俺なんて劣等生ですよね？」

「……まあ、そんなことはどうでもいい」

佐野先生は意外な返答に少したじろいだ　ように見えた　が  
俺の悪意の無い顔を見てすぐにいつもの表情に戻った。

「お前は知ってるか？」

「佐野先生の話には主語が抜けているということは知っています」

「殴りたいのか？」

「すみません。でも自分のクラスの生徒ぐらい覚えましょう」

俺は間違ったことを言っていないはずだ。

ふっ、これが俺の佐野先生にできる唯一の嫌味だ。しかしあまり  
言い過ぎると右腕を捻られて間接が外れる！！

「ギブアップか？」

「お願いします、許してください」

佐野先生から右腕を捻られ、素直に謝ってしまった。

俺は悪くないのに。

「全く……で、話に戻るが、お前は知ってるか？」

「学習してくださいよ、佐野先生。いや、元文武学校刀銃科目Sラ  
ンクの佐野香織先生」

「……さっきも知っているような言い方をしていたな。お前はどの  
科目でもSランクを取れるぞ」

「それは光栄です」

半ば呆れた様子で言う佐野先生にお辞儀をする。

佐野先生は見た目通りと言ってはなんだけど、昔　十数年前ぐ

らい前　一番取りにくい銃刀科目でSランクを取った、言わば戦闘の天才だ。

俺が何故これを知っているかというところ、この学校に入学する時、規制のかかっていない人間の情報を全て見たからである。

「話は戻るが……お前は明後日にある戦用祭デスマッチを知ってるか？」

「戦用祭ですか？　一応知ってますけど……。確か力？紋章を持っている者同士が一对一で戦うやつですよ？」

戦用祭とは元々、普通の学校で言う文化祭みたいなものだった。

しかし何時からか、それは紋章の契約者　つまり力を使える者の力量を測るものとして行われるようになってきた。

各学年でAランク以上　正確にはBランク上の者は多くても二十は超えないそうだ。

そのお陰で小さい子からお年寄りまで楽しめる行事にもなった。

「知ってるなら話は早い。お前は紋章を持っていたよな？」

俺は自分の右腕　今は包帯で隠している紋章に触れる。校長にSランクだと言われた時に貰ったものだが、今も使う気になれないので包帯で隠しているのだ。

先生達はみんなこの事を知っているので今さら隠したところで意味がない。

「……一応持っています。使う気はありませんよ？」

「何故お前はそこまでその力を隠したがるんだ？　別にいいじゃないか。その力があることを言えばお前はSランクになれるし、悪い事はないはずだが？」

俺には悪いことがあるんだよバーカ。だからお前はいつまでたっても不良教師ってあだ名がつけられるんだ！　まあ、口には出さないけど。まだ死にたくないし。

「その顔をやめろ。殴り飛ばしたくなる」

おっと、顔に出ていたみたいだ。気をつけないと。

「とりあえず俺はこの力を無闇に使う気はないので、失礼します」

「まあ、待て中川。お前の素顔を見せるわけじゃないんだ」

「どづいつことですか？」

わざとらしく首を傾けるが、本当にわからない。先生の言っていることは何一つわからない。

「お前は『仮面の騎士』<sup>ハイド・ナイト</sup>っていうのを知ってるか？」

先生の言葉　正確には『仮面の騎士』という言葉　に無意識だが反応してしまい、恥ずかしく思った。

「……ええ、知っています」

「お前にはあいつの真似をしてほいんだ」

「つまり子供達に人気の仮面の騎士を利用して、一昨年から下がり気味の戦用際の収入を上げたいんですね？」

俺の言葉に先生は驚いたような、呆気に取られたような顔をした。そして、はあ、と嘆息して、

「……時々お前のことをスパイか何かだと勘違いしてしまう時がある」

「安心してください。俺はスパイなどではないんで」

俺はスパイでもなければSPでもない。ただの凡人な高校生を指している若き少年だ。

まあ、戦闘生になってることだし凡人は目指してなんだけど。

「とりあえずお前にこれを渡しておくから戦用祭には必ず来いよ」

そう言っただけで差し出してきたのは　本物の仮面の騎士と同じであろう仮面。

聞くまでもないようだが、拒否権はないみたいだ。まあ、俺の正体がバレなければ特に気にすることもない。

一番気になるのは刀である蒼桜の整備<sup>メンテナンス</sup>が明後日までに終わるかどうか、である。

母さんの形見ということもあるが、純粹に整備の仕方がわからない。

俺は銃の整備士なのでいくつもの銃を整備してきたが、刀を整備したことはない。

銃の整備なら一時間も掛からない。それが二丁でも二時間になる

だけ。しかし刀はどうしても整備ができなかった。

それさえできれば後は実践で使うのみ。戦用祭は当然この学校の仲間と戦うことになるから刀は使わないと思った。しかし同時に仮面をつけていれば、素顔がバレないのでは？ 殺傷能力の高いものを使わなければ いや、そもそも戦用祭では死人がでることはない。

それは警備がいいとか救護班が早いとかそういう問題では無しに、だ。

事前に渡されるPDSをつけていれば絶対に死ぬことはない。正式名称を『絶対防御システム』といい、戦用祭の会場に特別に張られた結界の中では、生死にかかわる能力を受けたとしても強制失格となるがダメージを無効化してしまう。

「……失礼します」

いくつか言いたい事や確認しておきたい事があつたが俺はなんとかそれを呑み込んで、部屋から去っていった。

今から戦用祭の事で色々考えなければいけなかったが、とりあえずみんなの所へ戻ることにした。

みんなと別れた場所に来たが当然のようにみんなはいない。今思えば俺は移動中だった。当たり前だがみんながここで待っているはずがない。

今は放課後。茅梨や新庄さん、陽菜が帰ったとしても夏帆と世羅とわんこは多分だが教室に残っているだろう。

そう思い、教室の道のりを歩き始めてふと足を止めた。

今日はある人物に会わなければいけなかったことを思い出した。

その人はこの世界で この地球で知らない人がいないほど有名

な人物で、実際に見たものは俺と父さんと父さんの旧友のみ。

本当の名を知っている者はいない。知れ渡っているのは『陰』<sup>かげ</sup>という誰がつけたのかもわからない名前で、二つ名は『砂漠の塵気楼』<sup>デザート・ミラーシュ</sup>。

陰先生は俺の父さんの知り合いで、父さんが今の俺と同じ年齢の時、陰先生に教わっていたそうだ。つまり陰先生と父さんは師弟の関係で、俺も陰先生と師弟の関係を結んでいる。

そして今日は陰先生が直接講師してくださいさる日。実際は先生の作り出した塵気楼による影と戦わせるだけ戦わせて自分は姿を見せないが。

陰先生は姿を見せたことがないし、俺もその方法で強くなってきたので、今更陰先生のやり方に文句を言うつもりはない。

しかし、しかしだ！　せめて、一度でもいいので手合わせを願いたいものだ。

荷物は鞆以外何も持ってきておらず、鞆にも持って帰らなければいけないものは特に無い。

教室へ向けた足を半回転させ、俺は陰先生がいる大蔵屋敷へと向かった。

大蔵屋敷とは、今は誰も住んでおらず、掃除もされていないのでかなり小汚い。

しかしそれは陰先生の印象に　名前に　ピッタリの場所だ。ギギギと古くなって開けにくくなったドアを無理やりこじ開けて中へ。

ここは誰も使っていないので靴は脱がずにそのまま奥に歩いていく。廊下を歩く度にギシギシと悲鳴を上げる。

そろそろここも取り壊しが決まるんじゃないだろうか？　なんて思えてくる。

そして突き当たりを右に曲がり、元々洗面所だった場所についた。今では置いている物は何もなく、埃を被っているのでよくわからない。

洗面所には大抵ある物　鏡に自分の名前を書き入れる。

「中川空……つと」

自分の名前を書いた後、一步下がって、力いっぱい鏡を殴りつけた。動作は確かにそうだった。

しかし俺の拳は鏡を割ることなく、吸い込まれるように呑み込まれていった。反動をつけていたので自ずと体もついてくる。

とうとう体全体が鏡の中に入ってしまった。

見えた光景は空中。しかし、そこまで高い場所でもないので俺は平然と着地をした。

陰先生との修行は、この何もない空間でいつもやっているのだ。先ほどの鏡のトリックは少し難しいが俺からすれば簡単なこと。

この世界には超能力と呼ばれる最高の力がある。

一つは紋章を持ち、代償を払うことで力を使える『能力』。

もう一つは個々が体内に秘めている魔力を術式、魔方陣に組み込んで発動する『魔法』。

詳しい話はまた次の機会にするとして、鏡の話に戻るが、あれはいくつかの無系統術式を連結させて一つの大掛かりな魔方陣を作っている。まずは誰かに見られないようにする術式。そして鏡を別空間と繋げる術式と空間移動の術式を平行感覚で使用する。その他小規模のいろいろな魔法を使ってこのトリックはできているのだ。

「居ますか、陰先生？」

俺は何もないこの空間で声を張り上げて言った。いや、張り上げてはいないのだが

その質問に答えるように風が吹いたかと思うと、俺の後ろに一つの影ができていた。

「おお、久しぶりだな我が弟子よ」

影の上に人はいない。聞こえてきたのは声だけだった。

「久しぶりと言っても一週間ぶりですけど」

一週間に一度必ず来ているので久しぶりと言うほどでもない。

しかし陰先生は俺の指摘など特に気にする様子もなく、ハッハッハと不気味に笑った。

姿が見えないのでかなり怖い。

「さて、今日はどんな訓練をしたいんだい？」

「今日はこの蒼桜の刀術を教えてください」

袋に入れて背負っていた蒼桜を手に取る。

刀を袋から出し、それを影の前に置く。

「ほう。我が弟子よ、刀を使わない主が何故刀術を教えてくださいの  
だ？」

影は蒼桜を手に取り　こちらから見れば空中に浮いている

刀身を出した。

「陰先生は戦用祭デスマッチというのをご存知ですか？」

陰先生（影）は暫しの間黙っていたが、ああ、と思い出したように  
に呟いた。

「確か文武の行事だったかな？」

「はい、そうです。紋章を持った生徒が戦いあう、という行事です。  
それに出場することになったので」

「ふむ、なるほど。あの殺し合いもしない温い行事か。それで刀術  
というバリエーションを増やすということか」

陰先生（影）はまたハッハッハと不気味に笑い蒼桜を地面に置い  
た。

俺は置かれた蒼桜を手に取り、お願いしますと頭を下げた。

目上の者に頭を下げるのが嫌いな俺にとって珍しいことだ。

刀術が無ければ次の行事で俺が出ようと思うことはないだろう。

流石に銃と魔法、能力だけで勝てるとは思わない。

事実的に言えばそれだけ使えれば、能力を持たない一国を落とす

ことも不可能ではない。

相手が能力を使わないので、銃撃や剣術、魔法などの攻撃は能力で抑え、こちらは銃撃と魔法で倒すという作戦だ。

俺の夢が世界征服なら、結構な数の国が落とされていただろう。生憎そんな大層な夢は持ち合わせていないが。

しかし戦用祭なら結果的に言えば不可能だ。

今回の相手は能力を持ったBランク以上の戦闘生。勝てる保証は五分五分と言ったところだ。

相手が近距離系の能力を使ってきた場合、こちらは少ない能力と魔法しか使えなくなる。近接銃戦は得意ではない方なので。

刀術を使うことによってその弱点もカバーすることが出来る。

「どうですか？」

陰先生の考えるような唸り声が聞こえる。

まあ、陰先生が俺の頼みを断った事はない。今は何を教えるか考えているのだろう。

「……いいだろう。主にいい刀術を教えてやろう。名を夢幻」



『選出(チヨイス)』(後書き)

いつも読んでくださる方、初めて読まれた方、ありがとうございます

今回は特に無いです

では、次回も期待せずお待ちください！

『過去（パースト）』（前書き）

少し短いです。すみません！

『過去（パースト）』

中川の自宅前に三つの影が伸びていた。

「お兄ちゃんを本当に置いてきてよかったですか？」

「いいのよ。どうせいないとわかったらすぐに帰ってくるから」

夏帆と世羅と穂波（空にわんことつけられたが夏帆達は流石に呼びにくかったので、綺麗な毛並の『けなみ』から『ほなみ』に変えてこう呼んでいる）は空の家に先に帰っていた。

「教室に戻った時先生が穂波も学校に通わせるって言ってたから、メインウェポン主要武器を選ばないといけないでしょ」

主要武器とは基本的に使う武器のことで、当然だが人によって使いやすいものが違う。だから急な戦闘にも対処できるよう早めに主要武器を選ばないといけないのだ。

夏帆なら対人連銃、メアトル・カルチャー空は銃と刀を平衡感覚で扱えるので蒼桜とグランパレット、といった感じである。

本来ならば銃と刀を平衡感覚で扱える者は少ないのでとりあえず銃を、と考えて空の家にやってきた。

世羅にいたっては自身の家なのでこの解釈はおかしい。

しかし、それを伝える者にはいない。

倉庫の中には空のお古や空作の拳銃が置いてある。勝手に入っは仕事の得物があるとかでいけないのだが、空がある得物を穂波に（空はわんこに、と言っていた）渡せと言っていた。

「そらが言うにはこの辺にあると思うんだけど……あっ！ あった  
！」

棚の上に並べてあった、たくさん得物から夏帆が取り出したのは、綺麗に整備されている一丁の銃だった。

「その自信作であり初回作、しぐれれんさ時雨連銃よ」

「時雨……連銃？」

時雨連銃とは空が初めて作製した銃の名前であり、唯一の銃剣で

ある。

設計図は空が六歳の時に描き、現物は八歳で作ったそうだ。

小学校も中学校も高校までも捨てて、大学に入るといふ案が出されたが、子供の頃の空は丁寧な、嬉しい顔も悲しい顔も全くせず断った。

丁度その頃に、夏帆と世羅は彼に欠落部分が存在している事を知った。

インデリファレンス・シンドローム  
感情欠落症候群。産まれた時に自分の器に合わない魔力量を受け継いだ人にかかりやすい病気だ。

確率にして二億分の一。現在の人口は二億人弱。つまりこの世に二人ほどしかいない病気。

空は感情を持って見えるように見えるが、全て作り物。だからそれがわかる夏帆や世羅は彼が笑うと心が折れそうになる。

笑えないのに無理に笑う。悲しい事なのに悲しめない。怒りたいのに怒れない。喜びたいのに喜べない。

そんな代償を払っているにもかかわらず、国や組織は彼を化け物と呼ぶ。必要のないものを受け継いでしまっただけでその痛みから耐えなければならぬ。

彼にとって最大の痛みは関係である。

関係を作れば無理をしなければならない。関係を作らなければ化け物。

そんな扱いを受けてきた彼は更に最悪なものを無理やり埋め込まれた。

ある組織が開発していた人工紋章実験の紋章。

その実験は成功すれば国にとって最強で最高の戦力になる。

しかしその実験の実験体には膨大な魔力を持つ者しか使えなかった。紋章と同時に多量の魔力を注がなくてはならなかったのだ。

方法は至って簡単なものだった。

まず実験体の魔力を限界まで減らす。そこに魔力で作られた紋章を、魔力を注ぎながら慎重に埋め込んでいく。

たったそれだけのこと。

適合者は空が現れるまで一人だった。その人は別の国の人でその国最強といわれ、誰も太刀打ちができないほどの強さを兼ね備えていた。

流星に国も、別の国から来た者を実験に使うわけにはいかない。そこに丁度、空が現れてしまった。

時代が早ければその人と同じで、誰も手が出せない最強になれたかもしれない。

悲しいことに、一言で言えば運が悪かっただけなのだ。

他にも彼は

「大丈夫ですか？」

「えっ？」

夏帆は世羅の声で、自分が銃を持ったまま固まっていることに気づいた。

「大丈夫よ。ちょっと考え事をしていただけだから」

雑念を振り払うように頭を振って、穂波に時雨連鎖を渡して、

「ちよつと疲れたみたいだから家に帰るわね」

「あつ、はい！ 戦用祭、頑張ってくださいね」

「うん、任せてよ」

無理矢理笑ってみせて、夏帆は倉庫から出て行った。

『過去（パースト）』（後書き）

いつも読んでくださる方、初めて読まれた方、ありがとうございます  
す

更新遅くなり&短くてすみません……。  
では、次回も期待せずお待ちください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3620y/>

---

仮面の騎士（ハイド・ナイト）

2011年12月24日23時51分発行